

フォトアート 八ヶ岳を写真芸術の原点に。

「清里フォトアートミュージアム (K'MoPA)」の館長を務める
写真家・細江英公さんに、開館25周年を迎えるにあたっての思いと
今後の展望を聞いた。

文・島田環 撮影・砺波周平



世界中の若い写真家を ここ清里で育てていく

1995年の開館時からの柱のひとつに、「ヤング・ポートフォリオ」(以後、YP)がある。これは、世界中の35歳までの作家の優れた作品を購入し、パーマナント・コレクションとして収蔵していくという、長期的な視野に立ったプロジェクトだ。

「自分の写真がミュージアムにコレクションされたということは、写真家にとって、一生、誇りを持って生きていけるってことなんですよ」。

若い写真家ならではの、独創的で表現意欲に溢れた作品を選び、彼らに誇りを与え、勇気づけていくということがYPの理念である。また、彼らが育っていったとき、迷いや懐かしさからふたたび訪れ、若き日の自分と再会する原点ともなっている。実際、創作活動のなかで迷いを覚えた時なのか、「収蔵されている自分の作品を見せてほしい」と訪れる写真家がいるという。写真を始めたころの自分と再会するとともに、清里の風光明媚な風景に触れ、リフレッシュして心新たに帰っていく。

「清里が彼らの“心のふるさと”になってほしい。収蔵作品がここ、清里にあることで、若い時の写真に出会える。それは非常に重要なこと」。

さらに、若い写真家の作品は、往々にしてまだ評価が定まらないため散逸してしまいがちだが、K'MoPAに永久保存しておくことで、その写真が、さらに後の世代の写

真家たちの刺激となり、彼らを育てていく。細江さんは「優れた写真を見ることは大事なこと。もっと人の写真をよく見て感じてほしい」と、若い写真家につねづね伝えているという。

写真の感動が 視覚表現の目を広げる

細江さん自身の原点について尋ねてみると、中学生のころに父親のカメラを借りて写真を撮り始め、17歳の時、富士フィルムが始めた写真コンテスト「学生の部」の東京・神奈川部門で選出され、最終的に全国で最優秀賞を受賞したというエピソードに至る。1951年のことだ。

「それはものすごく意味のあること。僕個人にとって重要だったということではない。写真って、こういうものなのか！と、写真と芸術が結びつくのか！という意義がある。写真雑誌などではともかく、日本の一般社会では写真なんて単なる趣味のひとつとして目されていた。写真の持つ、社会的な意味、学問的な意味、芸術的な意味、様々な面で非常に大きな意味があるということが、だんだん浸透してきた」。

70年間、日本の写真文化を拓きながら、その歴史をつづさに見てきた第一人者の言葉が熱く、重い。

「日本における写真家の位置は、残念ながら非常に低い。欧米では、小学校でも写真の授業がある。写真というものを、ひとつの美術教育、芸術教育として、絵を学ぶこ



清里フォトアートミュージアム

☎ 0551-48-5599

🕒 10:00~18:00 (最終入場は閉館30分前) ※8月以外は、10:00~17:00 (入館は16:30まで)

🔥 火(祝日の場合は開館、7・8月の会期中は無休)、年末年始、展示替えなど休館あり

🎫 一般800円、学生600円、高校生以下無料

山梨県北杜市高根町清里3545-1222

www.kmopa.com

地図→P.72 D2



細江英公（ほそえ えいこう）

1933年、山形県米沢市生まれ、東京育ち。三島由紀夫を被写体にした『薔薇刑』、秋田県の農村を舞台に舞踊家・土方巽を撮りおろした『鎌鼬』など、耽美かつ幻想的な世界観が脚光を浴びる。1995年よりK'MoPA館長を務める。2017年、旭日重光章を受章。東京工芸大学名誉教授。



とと同じように初等教育に取り入れていくべきなんです」と、細江さんは繰り返す。子ども達の視覚的な表現力を写真によって育てていくことの意義はどこにあるのか。「写真は幼稚園児でも撮れる。子どもが自分の家族、おじいちゃん、おばあちゃん、自分の友達を写真に撮ってみる。絵よりもずっとリアルでリアクションが強い。写真に触れて心が強く動くことで、写真に限らず、視覚的に表現しようとする目が広がるわけです」。

細江さんの眼差しは、写真の教育という狭い範囲ではなく、絵画を含む視覚的な芸術教育全体にピントが合っている。

1998年にK'MoPAが、ORACLE会議（世界の美術館の写真担当キュレーターが集まる国際会議）のホスト館となった際のワンシーン。細江さんが「みなさん、日本製のカメラを持っている人、手を挙げてください！」と呼びかけると、「ジャンッ！」と、一斉に手が上がったという。

「世界中のカメラの大半が日本製なんです。そういう事実がありながらも、日本では教育のなかで活用されていない。これは、ものすごい矛盾。日本のカメラの技術の高さをビジネスの話だけではなくて、教育と結びつけて考えていくべき。我々は、それを清里でやりたいんです」。

写真で表現する楽しさをもっとポピュラーに

「世界中の人、プロでもアマチュアでも素

人でも……その使われているカメラのほとんどが日本製であるということは、写真に携わる者としては大きな喜びであり、誇りです。ただ、日本ではあまりにも写真がポピュラーなので、それが視覚文化を作り上げる根底にあるということに、ほとんどの人が気づかない。その間に、欧米や世界では、どんどん写真芸術の文化が発展していく」。

日本では写真がポピュラーだったがゆえに、写真と芸術を結びつける視点が看過されてきたという指摘に、細江さんの日本のアートシーンへのジレンマが覗く。

「写真は、邦画／洋画、邦楽／洋楽といったジャンル分けのない、ある種ワールドワイドな文化。かつては裕福でないと写真やカメラに触れられないという時代が確かにあった。でも今では携帯電話にカメラがついている。誰でも、小さな子どもでも簡単に撮れる。写真芸術はもっともっとポピュラーな存在になり得るんです」。

海外の展覧会に招かれる機会が多く、欧米における写真芸術に対するまなざしを肌で感じてきた細江さんだからこその思いのこもった言葉だ。

清里フォトアートミュージアムは、今後も、若い写真家の育成・支援を理念に、「写真で表現する」ということの感動を広めていく。そして、時代のさらなる革新のなかで、よりエネルギーで実験的なフォトアートの情報発信基地となっていこうと期待が高まる。

開館25周年記念 「細江英公の写真： 1950—2020 暗箱のなかの劇場」展 2020年7月4日(土)～12月6日(日)※2021年に延期

開館25周年を記念して、館長である写真家・細江英公が写真家を目指すきっかけとなった17歳時のデビュー作をはじめ、35歳までに次々と発表した〈おとこと女〉〈薔薇刑〉〈鎌鼬〉など写真史に残る代表作から、知られざる写真絵本の世界なども含め、主なシリーズから選りすぐった作品を展示。一人の表現者が繰り広げてきた半世紀以上にわたる芳醇な写真世界を振り返る。



《薔薇刑 作品5》1961©Hosoe Eikoh



『たかちゃん和僕』

（1967年出版／日本語版：小学館、1997年）30代にアメリカで出版した写真絵本。先鋭的でラジカルな作品とはまた大きく異なる一面に触れられる。会場では実際に手に取って見ることができる。



2019年度「ヤング・ポートフォリオ」展 2020年6月14日(日)まで ※11月8日(日)まで

年に一度、世界各地の35歳までの写真家から公募。東京（東京都写真美術館）、台湾（国立台湾美術館）でも巡回展を開催した。カメラや写真の技術向上、インターネットなど通信技術の普及によって、応募者はのべ77カ国からと広がった。また、世界各地の人びとに、収蔵作品を見てもらうことも容易になり、ますます求心力が高まっている。近年では、北杜市で育った若い写真家の中から、YPに選ばれるケースがある。トキタシオン（2016年度）、高島空太（同）。中学校の美術部で観に未だりといった経験が、アーティスト育成に繋がっている。2021年2月20日～9月26日、米カリフォルニア州サンディエゴのMuseum of Photographic Arts (MOPA) に巡回予定（2020年3月5日現在）。